エヌ・アイ・イー
わかやまNIEだより

Newspaper in Education 第18号 2018.1 和歌山県NIE推進協議会

事務局:〒646-8660 和歌山県田辺市秋津町100 紀伊民報社内 TEL.0739-24-7171 FAX.0739-25-3094 E-MAIL:nie@kiiminpo.jp

世界や地域との「出会い」と「対話」の営みとしての学びとNIE

和歌山県NIE推進協議会会長
和歌山大学教育学部教授
船越 勝

昨年3月末に、新しい学習指導要領が告示され、資質・能力を明確化し、育んでいくという方向付けがなされました。新しい学びが今求められています。ところで、学校での学びとは、教科書を基本的な教材として、公定された知識とスキル、態度を身につけていくという営みを意味しています。そこで用意されている知識は、学校での学びが公教育として行われているところから、日本のどの都道府県の子どもたちにとってもわかりやすい、普遍性・汎用性の高いものになっています。しかし、その反面、子どもたちの生活や経験から乖離された抽象的な知識、すなわち、脱文脈的な知識という特質を持っています。教育学や認知心理学では、こうした学校で学ぶ知識のことを「学校知」と呼んできました。しかし、たとえば、同じ「畑」という知識であっても、日常生活のなかに全く畑の存在しない大都市に生活する子どもにとっての「畑」と、大規模経営の農業を行っている地域の子どもにとっての「畑」と、中山間地で家族で食べるものだけを生産している家庭の子どもにとっての「畑」では、全くその意味やイメージは異なります。このような日常生活のなかで自然と身につけていく知識のことを「日常知」、あるいは「生活知」と言います。

このようにとらえると、学校での学びとは単純に「学校知」を伝達するということではなく、子どもたちの「日常知」や「生活知」と「学校知」とのギャップを前提にし、両者を重ね合わせ、摺り合わせながら、「生活」と「科学」が統合された新しい知を獲得していく営みであり、また、それを世界や地域の現実に当てはめ、活用したり、未だ「答え」のはっきりしていない事象を探究していく行為だということができるでしょう。

NIE(Newspaper in Education、エヌ・アイ・イーと略称)の実践は、「学校などで新聞を教材として活用すること」から出発しますが、新聞は世界や地域の現実の宝庫です。新聞を補助教材として授業に取り入れることは、子どもたちに世界や地域との「出会い」と「対話」の場を用意することであり、「日常知」「生活知」と「学校知」との相互作用を促し、新しい知と学びを創造していくことにつながっていきます。こうした営みが子どもたちに今求められる確かな資質・能力を育んでいくことにもなるのだと思います。

新しい年を迎えるにあたり、さらに和歌山県全体にNIEの取り組みを広め、子どもたちに質の高い学びと学力を身につけていって欲しいと願っています。関係の皆様のいっそうのご協力をよろしくお願い申し上げます。

第8回 近畿NIEフォーラムに参加して

和歌山県立和歌山高等学校 教諭 瀬岡美景

『NIE新たな発展へ』～未来型NIEを探る～をテーマに、第8回近畿NIEフォーラムが、台風一過が過ぎ去った翌日の8月8日、大阪市立天王寺中学校で開催され、講演、ワークショップで大いに盛り上がりました。

神戸市立博物館副館長でラジオのコメンテーターなどで活躍されている山崎整氏による「未来型NIEを探るーフェイクニュースがあふれる社会で」のタイトルで記念講演が行われました。具体例をあげながらフェイクニュースについて説明をしていただき、フェイクニュースには、流す意図や目的などがあることや全世界にあっという間に拡散する事実を知らされ、改めてその脅威について考えさせられました。情報化社会の中で、簡単に早くニュースを手に入れることができるからこそ、その信憑性や目的などにもしっかりと判断していく客観的な力が必要になってきます。フェイクニュースだけではなくネットニュースについても注意が必要だということをしっかりと理解しながら、「スピード勝負」の情報に振り回されないようにしたいと思いました。また実践例として、大学や高校での講義のお話から新聞を活用した授業を展開していくヒントをたくさんいただきました。スマホでは味わえない読むことの面白さに気づかせ、新聞の持っている魅力について知る機会を積極的に作っていきたいと思います。続いて、ワークショップの「まわしよみ新聞」を体験させていただきました。

ワークショップは、NPOまちらぼ代表理事陸奥賢氏による「まわしよみ新聞編集長養成講座」です。1G4名のワークでいくつかの地方紙から自分の好きな記事（面白い、気になる、何やコレ）を3枚抜き出し、それぞれ選んだ理由をプレゼンして、グループで話し合いルールとしての場所、コメント、イラストなどを入れて、一つの新聞の紙面を作っていく。メンバーの中には教員以外にも通信社の方々もいて、コラムや記事を書く裏ネタなども教えていただき、生徒になった気分で盛り上がりながらあっという間に楽しい時間が過ぎていきました。終了後、みんなで作り上げた新聞をポスターセッションしました。同じ記事を切り取っても視点の違いがあったり、自分の気づかなかった記事のプレゼンを聞いている中で人の話を聞く面白さを感じたり、自分のプレゼンに共感してくれることで自己肯定感が高まったりして、グループ内にコミュニケーションが自然と定着していくような気がしました。学校だけではなく、高齢者の施設や自治体、会社など様々な場面で「まわしよみ新聞」が広がっているそうです。自分自身が体験してその面白さにはまってしまいました。様々な場所で活用できる気がします。

改めて新聞の持っている力の奥深さ、可能性を再認識させていただいた1日でした。学校に戻り、授業を通じて、今日、自分が感じた面白さ、情報があふれている社会でしっかりと見極める力の必要性を教えていき、生徒と一緒に新聞の面白さを共有できる時間を作っていきたいと思います。まずは「まわしよみ新聞」に挑戦してみます。

教育に新聞を

和歌山県NIE推進協議会ホームページを開設しました

～和歌山県の新聞活用授業実践例を紹介したサイトです～

アドレス＝**http://nie.kiiminpo.jp**

NIEで
いきいき

NIEに記者として挑戦

読売新聞 和歌山支局 記者 石黒彩子

「中学1年生を前に新聞について授業をしてくれないか」

支局長から依頼を受け、NIE教育の一環で2017年1月、美浜町立松洋中学校で生徒の前に立つことになった。それまで、教壇に立った経験はなく、何を話せばいいのかと困惑したと同時に、新聞を身近に感じてもらえる絶好の機会だと心が躍った。

まずは担当教諭との打ち合わせから始めた。教諭から綿密に書かれた授業計画を手渡され、非常に驚いた。びっしり書かれていたのは学習の目的やタイムスケジュール。なるほど、いつもこういう書類を作って授業をしているのかと、先生という仕事の大変さを垣間見た。「せっかくなので授業っぽくしたくない。ちょっとした取材体験をしてほしい」と伝え、相談を重ねた。

与えられた講義時間は2時限分。事前にアンケートを実施してもらった。あらかじめ同じ日の新聞を十数部送付し、授業の中で新聞を読んでもらい、「気になる記事はどれか」「新聞は読んだことがあるか」「記者に聞きたいことは何か」などを質問。回答をもとに、話す内容を考えた。

当日はテーマを大きく二つに分けた。一つは、新聞を楽しんでもらおうと、新聞そのものについて解説した。事前の質問を踏まえて、読み方や取材の仕方、記者の必須道具などを紹介。自分で情報を取捨選択できるようにと、インターネットで出回るフェイクニュースの注意点についても触れた。

もう一つは、「顔」というコーナーを手本に、生徒たち自身に記事を書いてもらった。人に注目し、人生や思いを短くまとめる記事だ。本来は2人1組でお互いの話を聞いて、原稿を書くのも面白いと考えたが、時間は限られ、人数も多かったため、取材対象を記者とした。記者になった経緯や、やりがいなどを話し、生徒らが質疑応答で追加取材をして、それぞれに記事に仕上げてもらった。

結果は意外だった。楽しんでもらえると思った新聞解説の時間よりも、後半の方が反響があった。記者になったきっかけを語っていた時、教室は静まりかえり、生徒たちの真剣な目が一身に集まっているのを感じた。あまりの静かさに、心配になるほどだった。「心をつかんでいた証拠です」とあとからそっと教諭が教えてくれて安心した。出来上がった記事も、同じ話を聞いたはずなのに、一つ一つ個性にあふれていて興味深かった。

講義の出来は、正直なところ、反省点も多く、再挑戦できるものならしたいくらいだ。それでも、記者という仕事を知り、この出会いが少しでも心の片隅に残り、なにかのきっかけで思い出してもらえたらうれしい。新聞を初めてスクラップしたのは中学生の時だった。その時は、文章を書くのは好きだったが、記者になるとは夢にも思わなかった。新聞には社会と世界が詰まっている。まずは触れる楽しさから知ってほしい。

第8回「いっしょに読もう！新聞コンクール」

HAPPY NEWS賞に岩田凛咲さん（和大附属小2年）
全国奨励賞に有本晴香さん（和歌山市立四箇郷北小5年）

日本新聞協会は、このほど第8回「いっしょに読もう！新聞コンクール」の受賞者を発表しました。

全国から47699編の応募があり、小・中・高校部門の最優秀賞を各1編（合計3編）、HAPPY NEWS賞を1編、優秀賞を校種別に各10編（合計30編）、奨励賞を120編選んだと発表がありました。

また、団体応募386校の中から、優秀学校賞を小・中・高校各5校の合計15校、学校奨励賞143校が選定されています。

和歌山県内では、小学校から251編、中学校から256編、全体で507編の応募がありました。そのうち全国審査会で、HAPPY NEWS賞に和歌山大学教育学部附属小学校2年の岩田凛咲さん、奨励賞に和歌山市立四箇郷北小学校5年の有本晴香さん、が選ばれました。学校奨励賞には和歌山市立四箇郷北小学校、海南市立大東小学校、海南市立東海南中学校、県立日高高等学校附属中学校が選ばれました。

同時に県審査会において、県優秀賞に18名、県奨励賞に34名を選定しました。県内の受賞状況は、和歌山県NIE推進協議会ホームページ（http://nie.kiiminpo.jp/）に掲載されています。

岩田さんが取り上げた記事は、毎日新聞（8月1日朝刊）和歌山版の「子供の安全守る紙芝居」で、この記事を書いた最上和喜記者から岩田さんへ祝福のコメントが届いています。「県警交通企画課から『ぜひ会ってみて』と紹介されたのが山本さんでした。和歌山に暮らし、ボランティアの一環で50年という長期にわたり交通指導に携わっているという話を伺い、地道な活動が地域の安全を保っているのだと感じ、記事にしました。『輝集人』を読んで、山本さんの存在や取り組みの大切さを実感してくれたことがとてもうれしく思いました。普段細かく見ない新聞をじっくり読み、『輝集人にのれるようにー』と、頑張るきっかけにしてくれたことも記者冥利につきます。受賞、本当におめでとうございます。これからも和歌山のみなさんに身近な記事を書くので、時々、できれば毎日、新聞を開いてみて下さい。」

第9回「いっしょに読もう！新聞コンクール」はすでに募集が始まっており、応募の詳細は、NIEホームページ（http://nie.jp/）に掲載されています。多くの学校のご応募をお願いします。

岩田凛咲さん

有本晴香さん

※写真掲載は保護者の了解を得ています

第9回 いっしょに読もう！新聞コンクール

日本新聞協会は、今年も「いっしょに読もう！新聞コンクール」を実施します。
家族や友人といっしょに記事を読み、感想・意見などを書いて、記事とともに応募いただく新聞感想文コンクールです。

1 新聞を読もう ▶ 2 記事を決めよう ▶ 3 記事を読んで考えたことを書こう ▶ 4 家族や友だちに意見を聞こう ▶ 5 まとめよう ▶ 6 応募しよう

●対　　象：小・中・高校・高等専門学校生　　**●応募締め切り：2018年9月10日（月）必着**
●募集要項：2017年9月8日～2018年9月9日の新聞から興味を持った記事を切り抜き、
家族や友だちにも見せて意見を聞いたり話し合ったりしたうえで、応募用紙に記入して記事といっしょに送ってください。

主　　催：一般社団法人日本新聞協会　　コンクールの詳細（応募・問い合わせ先、対象紙一覧 など）▶NIEウェブサイト　http://nie.jp